



がつまったり、ガンや外傷で傷ついて漏れ

## 2. 胃や腸管が膨らんでいる場合

### 1) 胃が膨らんでいる場合

基本的に、食べ物、飲み物そして、空気を飲み込んで膨らんでいる場合が中心です。食べ過ぎ、飲み過ぎはご自分でわかるでしょうが、意外と気づいていないのが空気を飲み込んでいる場合です。飲み込んだ空気は、肛門からガスとして出る以外にも、ゲップとしてあがってきます。ゲップがよく出る方は空気を飲み込みやすい可能性が高いと考えられます。

### 2) 腸が膨らんでいる場合

3) の腸閉塞は腸だけ膨らむ場合もありますが、進むと胃も膨らみます。腸だけに問題が起こるものの代表は腸炎です。ノロウイルスやロタウイルスなどのウイルス性腸炎は吐き気もあるものの、病気の主な場は腸です。ウイルスによる腸炎で、腸内の環境が変わると、腸内の常在菌の組成や数も変わります。このため腸内の発酵菌が増えると、ガスの発生も増えて、お腹がパンパンになります。もちろん、腸壁から内腔へ水分がしみ出し腸内が水浸しになってお腹が張る原因になります。これは、下痢とし

## 3. 実質臓器の肥大・体積の増加

お腹の中の実質臓器とは、肝臓、脾臓、そして後腹膜である腎臓、膵臓などの、管腔構造をとらず、細胞がみっちりつまってできている臓器達です。臓器ごとにまとめましょう。

**肝臓**：もっとも一般的なのは、各々の肝細胞に脂肪が蓄積し、一つ一つの細胞が大きくなり、その結果、肝臓全体が肥大し体積が増加する**脂肪肝**です。その他、**慢性肝炎**や**アルコール性肝炎**などでも肝臓に炎症細胞の浸潤があったりむくみがでて、腫れて体積が増加し、お腹が張った感じがします。次に多いのが、肝細胞ガンや転移性肝

て起こります。

て出てくるので張るのは一時的です。

### 3) 胃も腸も膨らんでいる場合

腸のどこかで管がつまっていて、食物や便が先に進まない場合です。**腸閉塞（イレウス）**と呼ばれる状態です。大きな大腸ガンによって腸の内腔がつまったり、お腹の手術の癒着などで、腸管が引っ張られたりねじれたりして通過障害を起こす**癒着性イレウス**などがよく見られます。後者は経過観察などで自然に解消することが多いのですが、前者は手術でつまっている場所を取り除かなければなりません。

胃腸に通過障害を起こす目に見える問題が無いのにつまってしまい、胃も腸も膨らんでお腹が張ることもあります。よく見られるのは、頑固な便秘や、向精神病薬などの薬の影響で、胃腸を動かす神経がマヒしてしまい、食物・便を肛門方向へ進める蠕動運動が起こりにくくなっている場合で、**マヒ性イレウス**と呼びます。これらは、胃腸の聴診をすると、動きが悪く、ゴロゴロという音がしません。

ガンです。転移性肝ガンは、主に門脈経由でガン細胞が転移するのが一般的なので、大腸ガンや胃ガンからの転移が主です。その他、遺伝性の多発性のう胞腎で、肝臓にのう胞ができるタイプの方もいます。肝臓全体に水ぶくれが多発するため、肝臓の体積が激増し、正常の肝臓の数倍にも膨らみます。

**脾臓**：血液細胞の最終処理を行っている場所なので、処理しなければならぬ血液細胞が増える白血病などの血液疾患で、脾臓は肥大します。特に白血球の数が正常の数倍から数十倍になってしまう、慢性骨髄性

白血病などの骨髄増殖性疾患で、著明に脾臓の体積は増大します。その他、肝硬変などの門脈圧が上がる疾患でも脾臓は肥大し、機能亢進の状態になります。

**腎臓**：腎臓は腎不全のように機能が低下する場合、ほとんど萎縮します。ところが、腎臓に場所を占拠するものができれば別です。まずは、常染色体優性遺伝で遺伝する**多発性のう胞腎**。これは腎臓に無数ののう胞と呼ばれる水分の入った袋ができる疾患で、のう胞に正常な腎臓織が置き換われ、十分な腎機能が果たせません。大きさ

は、10倍以上にもなります。肝臓ものう胞だらけになることも多く、二重にお腹がパンパンにふくれます。腎臓ガンも腎臓が大きくなりますが、のう胞腎のように、お腹を占領するほどガンが膨らむことはありません。

**膵臓**：元々、体積の小さな実質臓器なので、ガンができてもお腹が膨らむほどの体積にはなりません。腸を動かす神経が近くを通っているため、そこへ炎症が及ぶと痛みや、腸運動のマヒによって、前述のマヒ性イレウスになる場合があります。

## 4. 膀胱に尿が溜まっている場合

尿閉と言われ、膀胱から尿の出口の間の尿管の通りが悪くなっている場合で、ほとんどが高齢者男性の、**前立腺肥大**や**前立腺ガン**が原因です。前立腺は膀胱の出口にあり、尿管を取り巻くように存在しているので、肥大してくると外側から管を締め付けます。また、前立腺肥大が比較的軽くても、風邪薬や鼻炎薬に含まれる抗ヒスタミン剤や、抗コリン剤で膀胱括約筋が収縮し、急に尿が出なくなる場合がありますので、尿が出にくくなら服用中の薬を確認する必要があります。該当する可能性のある薬は、主治医と相談の上、中止あるい

は用量を減らします。薬の効果が切れれば尿閉の副作用も消滅します。膀胱にどのくらい尿が溜まっているか、前立腺の大きさはどのくらいか、膀胱に腫瘍ができていかなどは、**超音波検査**で概ね知ることができます。お腹がぼんぼんになって苦しかったり痛い場合は、応急処置として、チューブを膀胱へ入れて尿を出す導尿が行われます。尿閉が続くと膀胱炎から腎盂炎に進む場合があります。こんなときは、大腸菌などの雑菌を退治する、抗生物質の内服や点滴・注射が行われます。

### 腹水が溜まる場合

腹水は、胃腸、肝臓、卵巣、子宮などを包む腹膜の中に溜まった液体成分です。主に水と塩分がたまった**漏出性腹水**と、炎症によってタンパク質や白血球などの細胞成分が多い**滲出性腹水**、そして、出血により血液が溜まった**血性腹水**があります。腹水が溜まると、液体成分と腸管に溜まった気体成分が隣り合います。このため、ポヨンと膨らんだお腹を打診すると、ポコンポコンと鳴ったり、**ブヨンブヨン**と波打つ感じがします。

1) **漏出性腹水**：心不全や腎不全などの水分のコントロールが不能になったり、肝硬変の様に血中タンパク質（アルブミン）が著明に減少し、血管内に水分を保てず、血管外にそれが出て行ってしまったものです。同様な仕組みで足の皮下に水がたまったムクミも併存します。原因疾患の治療を行ったり、フロセミドなどの利尿剤で、溜まっ

た水分を尿へ引っぱりだして解消します。

2) **滲出性腹水**：腹部に慢性の炎症があり、その結果IgGなどの抗体、炎症性タンパクなどが増えながら、腹水が溜まるケースです。結核性腹膜炎などの感染症、ガンが発生臓器の壁を破って腹腔内に細胞が散って起こる**ガン性腹膜炎**などが代表です。感染症は抗生物質で治療可能ですが、後者は抗ガン剤が効くこともありますが、治療が困難です。

3) **血性腹水**：腹腔内の出血は稀ですが、ガンが血管を破壊し出血する場合が主ですが、子宮外妊娠の卵管破裂など、比較的若い女性に見られることもあります。血性腹水は大概、激しい腹痛が伴っていますので、腹痛を伴い急にお腹がはって腹水が溜まってくるようなら要注意です。出血多量でショック状態に陥ることもあります。ガンによるものでは痛みが軽く、じわじわ出血している場合もあります。